View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tokushima University Institutional Repository

5. 喜賓会設立における蜂須賀茂韶の存在と旅行案内書に描かれた四国

佐藤　征弥

1. はじめに

平成 15 年（2003）に政府は、訪日旅行促進事業（ビジット・ジャパン・キャンペーン）を開始し、広報やインフラ整備を強化して訪日外国人客数の増加を図ってきた。その結果、2003 年（平成 15）に 521 万人だった訪日外国人観光客は、平成 29 年（2017）には 3,001 万人に増加した[1]。

日本で最初に作られた外国人観光客の誘致のための組織は喜賓会（The Welcome Society）である。喜賓会は明治 26 年（1893）に設立され、旅行案内書の発行、1903 年の内国 勧業博覧会で来日した外客の接遇、優良ガイドへの監督証や徽章交付などなどを行った[2]。約 20 年の活動の後、明治 45 年（1912）に出来たジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）に事業を引き継ぐ形で大正 3 年（1914）に解散した。

喜賓会の会長に就いたのは徳島藩最後の藩主で、明治維新後は外交官、政治家、実業家として活躍した蜂須賀茂韶である。近年、観光産業に関する研究が盛んになるとともに喜賓会に言及する研究が増えてきたが、会の創立・運営において渋沢栄一や益田孝の貢献が注目され、蜂須賀茂韶については深く取り上げられることがなかった。そこで、本報告の前半では、蜂須賀茂韶が会長となった理由について考えてみたい。また、後半では、喜賓会の活動の一つである旅行案内書の発行に関して、四国がどのように紹介されていたか記すことにする。

2. 喜賓会設立における蜂須賀茂韶の存在

蜂須賀茂韶の海外での活動

徳島藩の最後の藩主となった蜂須賀茂韶は、弘化 3 年（1846）、徳島藩の 13 代藩主蜂須賀齊裕の次男として江戸藩邸で生まれ、15 歳まで江戸で過ごした。慶應 4 年・明治元年（1868）、齊裕が亡くなると阿波守となり第 14 代の藩主となるも、すぐに明治維新を迎えた。翌明治 2 年（1869）に徳島県知事となり、明治 4 年（1871）に知事の職を辞した。

明治 4 年（1871）10 月 22 日に明治天皇が「華族の海外留学を奨励し給へる勅諭」を発し、

---

[1] 日本政府観光局（JNTO）の平成 30 年（2018）12 月 19 日付報道発表資料.（https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/181219.pdf）.

[2] 中村宏.「戦前における国際観光(外客誘致)政策—喜賓会,ジャパン・ツーリスト・ビューロー,国際観光局設置」.神戸学院法学第 36 巻第 2 号.（2006）.p107-133.

華族や旧藩主の子弟の海外留学を奨励すると、すぐさま翌年の 1 月にイギリスに私費で遊学した。一時帰国するが再びイギリスに渡り、オックスフォード大学で政治、経済学を修め、明治 12 年（1879） 1 月に帰国した。

イギリスに着いてすぐに鉄道の発達を目の当たりにした彼は、日本の富国のために鉄道の導入が急がれると考え、明治 5 年（1872）10 月に「鉄道建築之義ニ付建言書」を太政官に提出した[3]。それを契機として日本鉄道株式会社が設立され、彼も株主になった[4]。イギリス遊学中の鉄道への関心と建言書提出は、後年の喜賓会の創設にあたって交通インフラ関連の会社の協力を得るのに役立つことになる。さらに、彼はイギリスに徳島の若者たちなどを帯同したが、一行には旧徳島藩士小室信夫も加わっていた。小室信夫は、帰国後の明治 15 年（1882）、日本郵船の基礎となった共同運輸会社を設立し，奥羽鉄道や京都鉄道の設立にも関わるなど、彼もまた交通インフラの整備に努めた人物であった。

蜂須賀茂韶は、帰国後、明治 15 年（1882）12 月に特命全権公使を拝命し、翌明治 16 年（1883）にパリに赴任した。フランス、スペイン、ポルトガル、ベルギー、スイスの公使を兼務し、明治 19 年（1886）に帰国した。在任中はジュネーブ条約調印、メートル条約調印、日本フランス間の郵便為替による送金の条約署名、スペイン外務省と関税交渉などを行なった。後述するように、喜賓会の創設メンバーの何人かは、彼がイギリスおよびフランス滞在中に知り合った人物である。

任を終えて帰国した蜂須賀茂韶は、第 11 代東京府知事（1890～91）、貴族院議長（1891～96）、文部大臣（1896～97）などの要職を務めた。喜賓会設立時には貴族院議長であった。

喜賓会の構成

観光業に関する研究において、喜賓会に初めて注目したのは白幡洋三郎であった。彼は喜賓会の結成を実質的に推進したのは、明治の実業界に重きをなした渋沢栄一と三井の大番頭といわれる益田孝の両名であったとし[5] 、益田孝が明治 20 年（1887）に 8 ヶ月かけて欧米を回り、特にパリの観光産業に感銘を受け、明治 21 年（1888） 1 月、東京商工会に「外国人接待協会」の設立を提案したことが直接的な契機であったと記している[6]。

喜賓会の綱領[7]には、設立の目的が次のように記されている。「我が国山河風光の秀、美術工芸の妙、夙に海外の賞賛する所なり。万里来遊の紳士淑女は日に月に多きを加ふるも之を待遇する施設備わず、旅客をして失望すること少なからざるを遺憾とし、同志深く之を慨し、遠来の子女を歓待し、行旅の快楽、観光の便利を享受せしめ、間接には彼我の交際

---

3 徳島県立文書館編集・発行. 「第 32 回企画展 徳島近代交通史 ― 船から鉄道へ ―」（2006）.
4 露木亀太郎.「蜂須賀茂韶公 隠れたる功績」.私家版.（1937）.
5 白幡洋三郎.「異人と外客―外客誘致団体『喜賓会』の活動について―」吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』.京大人文科学研究所.（1985）.p113-137.
6 白幡洋三郎.「旅行の産業化―喜賓会からジャパン・ツーリスト・ビューローへ―」.日本産業技術史学会『技術と文明』第 2 巻・第 1 号（1985）.p79-96.
7 喜賓会.「喜賓会解散報告書」.（1914）.

を親密にし、貿易の発達を助成するを以って目的とす」。また、その目的のため次の活動を行うことが示された。

旅館の営業者に向けて設備改善の方法を勧告すること
善良なる案内業者を監督奨励すること
勝地・旧跡・公私建造物・学校・庭園・製造工場等の観覧視察上の便宜を謀ること
来遊者を歓待し、又我国貴顕紳士の紹介の労をとること
完全なる案内書及案内地図を刊行すること

綱領に示された創立時の役員は次の通りであった。

会長：蜂須賀茂韶
幹事長：渋沢栄一
幹事：横山孫一郎、鍋島桂次郎、益田孝、三宮義胤、福沢捨次郎、木戸孝正
評議員：井上勝之助、岩下清周、大倉喜八郎、小野義真、若宮正音、吉川泰次郎、高田慎蔵、園田孝吉、辻久米吉、中上川彦次郎、中田敬義、梅浦精一、矢野次郎（二郎）、曲木如長、古沢滋、ブリンクリー、コンダー、デニソン、荘田平五郎、ジェームズ、平岡熙、森村市左衛門、末延道成

白幡洋三郎が組織の発足を推進した人物として挙げた渋沢栄一は幹事長に、益田孝は幹事となった。会長職には蜂須賀茂韶が就いたが、この点について深く掘り下げた研究は見当たらない。下にメンバーの人選について分かりやすくまとめた石井昭夫の文章[8]を引用するが、蜂須賀茂韶の会長就任の背景が若干示されている。

会長はイギリス遊学の経験があり、フランス公使や文部大臣も務めた国際派の蜂須賀茂韶(侯爵)、幹事長に渋沢栄一、常任幹事に福沢諭吉の次男でアメリカ留学経験者の福沢捨次郎、幹事に益田孝、横山孫一郎(帝国ホテル常任理事)、神大鍋島家当主で外交官として欧米滞在経験の豊かな鍋島桂次郎、宮内省の要職にあった三宮義胤(のち男爵)、岩倉使節団に同行してアメリカに留学し木戸孝允の養子となった木戸孝正(宮内庁侍従)という錚々たる布陣でした。他に評議員として 23 名が喜賓会の事業運営に参画しており、この中には英字紙ジャパン・メイル主筆の J.H. ブリンクリーや鹿鳴館など多

[8] 石井昭夫.『日本のインバウンド観光発展史』(第 1 部) .(2018).p64-65.
http://www7b.biglobe.ne.jp/~aki141/inp1ch31.pdf

くの西洋建築を手がけた J.コンダー(コンドル)、外務省顧問だった H.W.デニソンのような日本通の外国人 4 名も含まれていました。

蜂須賀茂韶について、政界の要職に就いたことがあり、海外経験も豊富であると指摘している。しかし、彼が喜賓会について直接言及した資料は見つかっていないため、喜賓会設立にどうして関わりを持つようになったのかは明らかになっていない。本稿では、蜂須賀茂韶のそれまでの活動の詳細や、喜賓会のメンバーとの交流を探ることから、彼が喜賓会設立に携わり、会長に就いた経緯を浮き彫りにしていく。

まず、政治・外交面において次のような背景がある。白幡洋三郎は、喜賓会はフランスとスイスの外客受け入れ組織を手本としていること、また創立は明治 10 年代後半から始まった外国との条約改正の動きと関係があるとし、喜賓会の役員の中にも、条約改正と関わる人選がなされたと指摘している [4]。蜂須賀茂韶が明治 16～19 年（1883～86）の間、パリで駐フランス国特命全権公使を務めていたことは前述した。その間、観光業に対してどのような意識を持って活動していたかは不明であるが、条約改正については、スペイン外務省と関税や日本での商取引に関する条約改正交渉を行なっていたことが分かっている[9]。また、このような経験があったためであろう、明治 26 年（1893 年）に日本で初めてのスペイン語学習のための学会 Sociedad de la Lengua Española（西班牙学協会）を東京に設立した[10]。

次に、蜂須賀茂韶は喜賓会の他のメンバーとの間に太い人脈をもっていた。まず、幹事長に就いた渋沢栄一とは強力なビジネスパートナーであった。二人が協力した会社には、前述の日本鉄道株式会社があり、他にも大阪紡績株式会社、東京人造肥料株式会社、日本煉瓦製造株式会社、東京帽子株式会社があった。渋沢栄一が経営を担当し、蜂須賀茂韶は金策のため華族や富豪を説得してまわったとされる [3]。これらの会社のうち、東京人造肥料株式会社と日本煉瓦製造株式会社には、益田孝、大倉喜八郎も加わっていた。益田孝の弟である益田克徳もまた東京帽子株式会社の経営に参加した。また、蜂須賀茂韶は留学から帰って間もなく、33 歳の若さで東京海上保険株式会社を設立し、初代社長を務めたが、社長職を退いて後、3 代目社長の時に支配人を務めたのも益田克徳であった。小野義真は東京海上保険、日本鉄道株式会社の設立に携わった。末延道成も船舶、鉄道、保険関連の実業家で、東京海上火災保険取締役会長を務めた。

喜賓会のメンバーの中には、蜂須賀茂韶が海外で交流をもった人物も多く含まれる。イギリス留学中に交流を持った人物として古沢滋、三宮義胤、園田孝吉がいる。古沢滋は明治3年（1870） 7月にイギリスに派遣され政治経済学を学び、明治 6 年（1873）12月に帰国した。蜂須賀茂韶もそうであったが、古沢滋はイギリスの自由主義に大きく影響され、帰国

---

9 イギリスの週刊の新聞 Banbury Advertiser の 1885 年 11 月 26 日の記事.

10 Ugarte Farrerons, V. (2012). “El español em Japón”. Recuperado el 5 de febrero de 2015, de Anuario 2012: “El español en el mundo” (Centro Virtual Cervantes): http://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_12/ugarte/p01.htm

後、自由民権運動の熱烈な推進者となった[11]。『大阪日報』の社長や『自由新聞』の主筆を務めてから官途に転じ、大蔵省、内務省、農商務省、逓信省で働いた。留学時代から蜂須賀茂韶と交流があったことは『古沢滋関係文書』から分かる[12]。

三宮義胤は明治 3 年（1870）に東伏見宮彰仁親王に随行してイギリスに留学し、明治 10 年（1877）に外務省に移り駐ドイツ日本公使館に勤務し、明治 13 年（1880）に帰国した。その後宮内省に移り、式部長を務めた。蜂須賀茂韶とは、留学時期と外交官の時期が重なる。特筆すべきエピソードとして、三宮義胤はイギリス留学時に現地の女性アレシア・レイノアと結婚したが、アレシアの地元で行われた結婚式においてベストマンを務めたのが蜂須賀茂韶であった[13]。

園田孝吉は、明治 7～22 年（1874～89）の間、外交官としてイギリスに派遣された。蜂須賀茂韶とは、イギリス留学時代に交流があり、日本がイギリスに建造を依頼した軍艦「比叡」の進水式におけるパーティで、蜂須賀とともにスピーチを行なった[14]。園田孝吉は、帰国後、日本鉄道株式会社や東京海上火災などに勤め、蜂須賀茂韶とはビジネス上の接点もあった。

図１ ガイドブックに掲載された蜂須賀茂韶と渋沢栄一の写真

喜賓会発行のガイドブックと簡易版には、会長である蜂須賀茂韶と幹事長である渋沢栄一の二人の写真が掲載されている（左はガイドブックの第 3 版増訂、右は第 5 版増訂より）。

---

[11] Andrew Fraser. “Political Leaders of Tokushima, 1868-1912”, in The Australian National University eds. “East Asian History”, Issue No.6 (1993).

[12] 『古沢滋関係文書』. 国立国会図書館憲政資料室, 資料番号 36〔台湾事件ニ付意見英文草稿・蜂須賀茂韶宛 古沢滋英文書簡案・小室子息並 Gortrude Nedritt 宛小室さだ書簡英訳草稿〕.

[13] イギリスの新聞 Stamford Mercury の 1874 年 5 月 8 の記事.

[14] The Tenby Observer Weekly List of Visitors and Directory の 1877 年 6 月 14 日の記事.

また、直接付き合いがあったか未確認ではあるが、蜂須賀茂韶がイギリスやフランスに滞在していた際に交流を持った可能性がある人物は以下の 5 名である。横山孫一郎は、大倉組ロンドン支店長や帝国ホテル取締役、日本製紙株式会社社長を務めた人物であるが、明治 8～12 年（1875～1879）にロンドンに滞在しており、茂韶の留学時期と 2 年重なる。三井財閥の中上川彦次郎や、外交官でありドイツとベルギーの特命全権公使を務めた井上勝之助ともイギリス留学時代が重なる。三井物産の岩下清周は明治 16 年（1883）からパリ支店に勤務し、明治 21 年（1888）に帰国したが、蜂須賀茂韶がパリに任についていた期間、岩下もずっとパリにいた。中田敬義は榎本武揚や陸奥宗光が外務大臣だった時に大臣秘書官を務めた人物だが、蜂須賀茂韶がパリ公使館にいた時期にはロンドン公使館書記生を務めていた。

以上のように蜂須賀茂韶は、外交において、交通インフラのビジネスにおいて、そして政治家として、喜賓会の創立メンバーの多くと幅広く太い人脈を有していた。喜賓会の創立時には、貴族院議長という要職にあり、また公爵というメンバーの中で最も高い爵位を有していることが会長に選ばれた大きな理由であることに間違いないだろうが、肩書きだけの問題ではなく、名実ともに会長にうってつけの人物であったと言える。

3. 喜賓会発行のガイドブックに描かれた四国について

喜賓会の設立目的の 5 番目に「完全なる案内書及案内地図を刊行すること」が挙げられていたが、それが実現したのは創立から 12 年後の明治 38 年（1905）であった。旅行案内書（以下ガイドブックと呼ぶ）は “A guide book for tourists in Japan” というタイトルで 4 月 24 日に刊行され、ガイドブックの簡易版（以下単に簡易版と呼ぶ）である “Useful notes and itineraries for traveling in Japan” が、少し早い 3 月 9 日に刊行された。ガイドブックと簡易版の冒頭には、喜賓会についての説明が記載されており、訪日外国人は 3 円払って会員となれば、ガイドブックと地図を得られると書かれている。訪日した外国人観光客の利用だけでなく、トマス・クック&サン社などを通じて海外にも配布され、観光客の誘致にも大きな役割を果たした[15]。これらは版が重ねられ、そのうちガイドブックは第 3-5 版が、簡易版は第 4-8 版が国立国会図書館デジタルコレクションに公開されており、インターネットで自由に閲覧できるようになっている。本稿では、明治 40 年（1907）発行されたガイドブック（第 3 版増訂）ならびに簡易版（第 5 版増訂）に基づいて話を進めていく。

喜賓会に関する説明の最後に、会員になった者への特典として、日本各地の大きな学校、病院、庭園、工場、鉱山などのリストが並び、紹介状があれば見学できることが記されている。四国では、別子銅山がそのリストに入っている。

---

[15] 石井昭夫.「日本の国際観光宣伝小史」『国際観光情報』国際観光サービスセンター（2011 年 8 月号）, p3-8.

続いてガイドブックおよび簡易版には、いくつかのお薦めの旅行プランが示されており、横浜あるいは神戸を起点として、どこをどのように旅行してまわるか旅行期間に応じて例示されている。旅行期間が 1 週間のプランの場合、横浜に上陸し、東京、日光、京都、と回って神戸を出港するという旅程（神戸からの逆順もあり）を薦めている。2 週間のプランでは、横浜に上陸し、東京、日光、鎌倉、宮ノ下（箱根）、名古屋、京都、奈良、大阪、神戸出港という旅程（神戸からの逆順もあり）を薦めている。3 週間のプランでは、上記の場所に加えて、松島、山田（伊勢）、天橋立、宮島などの風光明媚な地を訪ねることを薦めている。もっと時間があれば、塩原、伊香保、草津、熱海、宝塚、有馬、道後、別府、武雄、雲仙などの温泉保養地や、東京から甲府・富士川急流、甲府から軽井沢、大阪から高野山、岡山から出雲、小倉から耶馬渓、八代から鹿児島・球磨川急流を訪ねることを薦めている。そのほか、夏の富士山、岐阜の鵜を使った漁の見学、夏の北海道も良いと記されている。

これらの推奨プランのうち、四国で入っているのは道後温泉のみで、それも 3 週間よりも長い旅行期間が取れる場合である。四国は観光地としての価値が極めて低いと言わざるを得ないが、その大きな要因となっているのは後で述べるように交通の不便さであろう。

四国四県の見どころ

ガイドブックでは推奨プランに続いて、全国の観光地の見どころや交通網や宿泊施設が細かく紹介されている。四国は 27-29 章に載っており、各章のタイトルを訳すと「神戸から淡路、徳島へ。」、「神戸から岡山を経由して高松、琴平へ。多度津から松山へ。」、「神戸から宇品を経由して高浜・松山へ。松山から高知へ。」となる。すなわち、四国へは神戸から船で渡り、上陸地を徳島、高松、松山と想定して 3 つの章が区切られている。

以下、四国の見どころがどのように記載されているか、県ごとに箇条書きする。ガイドブックでは、一つの県が別の章にまたがって重複して載っている場合があるが、ここではわかりやすいように県毎にまとめて示すことをことわっておく。また、宿泊を奨める街にはホテルや旅館の名前がローマ字表記で載っている。当時の名称が確認できなかった宿泊施設はカタカナで示すことをことわっておく。

【徳島県】

徳島で紹介されている事柄は、四国の中で最も少ない。ガイドブックでは各地の名所が太字で示されているが、徳島県で太字で示されている地名は徳島市だけである[16]。鳴門の渦潮についても、詳しく紹介されているが、神戸から淡路島そして徳島に至るという旅程の説明の都合上、淡路島の福良の項目に入れられている。

[16] もう一つ”Nakasehae”という地名が鳴門海峡の説明の中に太字で示されている。鳴門海峡にある「裸島」を指していると思われるが、現在は使われていない名称である。

鳴門の渦潮

・淡路島の鳴門岬と阿波のマゴシマ[17]の間の 1 マイルの海は、有名な鳴門海峡である。潮と流れが海峡の岩礁とぶつかり、百雷のような激しい音を立てる。形成される渦の大きさは 60 フィートに達する。この驚くべき光景は大潮毎に繰り返されるが、一番の見頃は弥生の大潮の時である。

・淡路島の福良と鳴門の撫養とは船で結ばれている。渦潮を見るための船も手配できる。

徳島市

・人口は 63,710 人である。

・神戸から船で 6 時間かかる。

・旅館は「平亀楼」と「ヤナギヤ」。

・蜂須賀氏が治めた城下町であり、大滝山、勢見山、城址の眺めが良い。

・徳島から船戸まで鉄道が敷かれている。

・船戸から池田（宿泊「松又旅館」）を通って愛媛の川之江に行くことができる。人力車を使うのが実際的である。

・徳島から高松へは、引田（宿泊「イセヤ」）を通る海沿いを行くルートが、人力車の道が整備されていて、眺めも良い。

【香川県】

香川県において太字で紹介されているのは、小豆島、寒霞渓、高松、屋島、宇多津、丸亀、多度津、善通寺、琴平である。琴平については写真付きで金刀比羅宮が紹介されている（図 2）。

小豆島

・松林の風景が美しい。

・寒霞渓の紅葉が見事である。

高松

・人口は 37,430 人である。

・宿泊「高松ホテル」。

・最近築かれた港は、瀬戸内海では最も良い港の一つである。

---

17 「孫崎」の誤りか。

・玉藻の裏と呼ばれる海浜に城がある。

・クリバヤシ公園またはリンリツ公園と呼ばれる広さ 132 エーカーの庭園がある[18]。

・屋島は 12 世紀に源氏と平家が戦った古戦場である。

・五剣山は頂上の岩の風景が名高い。

・高松—琴平間は鉄道が通っていて 2 時間かかる。

宇多津

・聖通寺には、重さ 1 万貫（80,000 ポンド）の石があり、片手で動かすことができるので有名である[19]。

丸亀

・宿泊「玉川楼」。

・城下町で今は駐屯地となっている。

多度津

・宿泊「花びし」。

・良港があり、尾道と結ばれている。

善通寺

・宿泊「マツモトヤ」。

・駐屯地である。

・地名と同じ名前の寺がある。

・屏風ヶ浦は弘法大師の生誕地である。

図 2 ガイドブックに掲載された金刀比羅宮の写真

琴平

・宿泊「虎屋」。

・大物主神を祀る金刀比羅宮がある。572 段の階段の長い参道には石灯籠が並ぶ。神殿には宝物や絵が多く飾られている。また、近くに満濃池がある。

・琴平から池田、大田口、杉を通って高知へ行くには人力車で 2 人の車夫を使って 2 日かかる。

---

[18] 栗林公園のこと。リンリツの誤表記はその後の版でも続いた。

[19] 聖通寺の北側の聖通寺山にある「ゆるぎ石」のこと。

・琴平から西へ向かうには、いったん多度津まで戻り、海沿いの道を通って松山へ向かう。

【愛媛県】

愛媛県で太字で紹介されている所は、松山、別子銅山、新居浜、西条、今治、道後、宇和島、久万町、久栖、高浜、太山寺、興居島である。

別子銅山

・多度津から松山までの間は見どころが少ないが、別子銅山は別であり、足尾銅山と並ぶ日本で最大の銅山である。

・多度津から観音寺、川之江（旅館「橋本屋」）、土居、泉川まで人力車で 12 時間かかる。泉川から別子銅山に行くには人力車は無理で、歩くか鉱山所有の鉄道に乗せてもらうことになる。

新居浜

・宿泊「ガンキ楼」。

・多度津から船で６時間かかる。

・別子銅山のオフィスがある。

西条

・旅館「福亭」。

・西条から壬生川、今治港、北条を通って松山に至る。

・西条から鉄道を使って、川上、横河原を通って高松へ行くことができる。

今治

・藤堂高虎の作った城がある。

・今治港から三津浜までは船で行き、そこから松山まで鉄道で行ける。

高浜

・神戸から松山に行くには、宇品まで鉄道で行き、宇品から 4 時間船に乗って瀬戸内海を渡り、四国の中で重要な港である高浜に至る。

・伊予鉄道の北の端の駅がある。

・宿泊「延齢館」。

・優れた海水浴場がある。

・太山寺の本堂は楔や副え木を用いない珍しい建築である。

・興居島には伊予小富士と呼ばれる魅力的な姿の山がある。

・松山には鉄道で半時間で着く。

三津

・三津または三津浜は高浜の次の駅であり、ここの港はこのあたりの地域の最重要港の一つとなっていて、瀬戸内海の多くの港と定期便で結ばれている。

・宿泊「窪田」。

松山

・人口は 37,842 人である。

・宿泊「きどや旅館」（四国の宿泊施設の中で唯一 Foreign food provided のマークが付いている）。

・街の中心に城があり、天守閣から四方の眺めを楽しめる。

・日露戦争で数千人の捕虜のための収容施設を用意した。

・道後は日本最古の温泉保養地である（宿泊「フナヤ」、「チャキン」）。

・松山から高知へは海沿に宇和島を通るルートと、久栖を通る内陸のルートがある。

・宇和島へ行かずに久万町から高知に向かうことができる。久栖を通って高知に入り、川口、越知（宿泊）を通って高知に行く。

宇和島

・宿泊「居村」。

・伊予地方で 2 番目に大きい港があり、大阪商船会社の定期便が就航している。

・鶴島城と呼ばれる城がある。

・宇和島から高知へは、距離が短くて道も良い内陸ルートを勧める。人力車で 2 日の移動である。途中、久万町、久栖、川口、伊野を通る。川口と伊野の間を船で仁淀川を下れば、1 日短縮できる。

【高知県】

太字で示されているのは高知と吸江の２つである。

高知

・人口は 35,518 人である。

・高知は、大阪と神戸からそれぞれ一日おきに往復する船便で行き来するのが一般的である。

・宿泊「城西館」。

・山内氏が治めた城下町であった。咸臨閣と呼ばれる 3 階建の天守はよく保存されている。

・名産物はサンゴと紙である。

・吸江のあたりは見所が 10 箇所ある。柳橋からの景色は心地よい。五台山からの眺望が素晴らしい。湾の外に浦戸港がある。

・高知から徳島へは海沿いに安芸、浮津、佐喜浜、日和佐を通る海沿いの道がある。しかし、繁藤、大久保を通って吉野川沿いに進む内陸の道を勧める。2 日かかる。

以上がガイドブック“A guide book for tourists in Japan”に紹介された四国である。次に簡易版である“Useful notes and itineraries for traveling in Japan”についてであるが、お薦め旅行プランまではガイドブックと同じで、違いはその後に続く地方の紹介がないだけである。従って、簡易版で紹介されている四国は、会員向けの特権である別子銅山見学と、お薦め旅行プランに入っている道後温泉のみである。

四国の特徴

喜賓会が発行したガイドブックにおいて、四国の中で比較的大きく扱われている観光資源は、鳴門の渦潮、金刀比羅宮、道後温泉の 3 つであった。日本の他の地方に比べて乏しいと言わざるをえない。また、四国の中でも徳島と高知は、香川や愛媛と比べて扱いが小さい。喜賓会のメンバーは、会長の蜂須賀茂韶が徳島の旧藩主であったことをはじめ、幹事の古沢滋、小野義真、末延道成の 3 人の高知出身者が入っていたが、地元を贔屓することはなかったようである。

また、意外なことに四国八十八ヶ所霊場についてまったく記載がない。善通寺の名前が出てくるが、霊場として挙げられているわけではない。弘法大師空海については、九世紀の高僧で、屏風ヶ浦が生誕地であるとだけ記されている。四国八十八ヶ所霊場やお遍路について記されていない理由として、特定の傑出した寺院があるわけではないので取り上げにくかったことが考えられる。また、喜賓会のガイドブックは、観光地や観光資源を列挙して旅程を示すことに特化しており、文化や宗教に関して解説がほとんどないことも、理由になっていると考えられる。しかし、外国人のための四国八十八ヶ所霊場に関する情報が当時まったくなかったわけではない。喜賓会のガイドブックの発行より少し早い明治 36 年（1903）に刊行されたチェンバレンとメーソンによる日本旅行のガイドブックの第 7 版に

は、四国霊場と遍路が紹介されている[20]。そして大正 6 年（1917）になると本格的に遍路を行なった外国人が登場する[21]。

四国が喜賓会のガイドブック及び簡易版において他の地方と比べてあまり紹介されていないのは、鉄道の整備が遅れ、四国内での移動が不便であったことが大きな理由として考えられる。ガイドブック及び簡易版には鉄道網を示した日本地図が掲載されているが、四国の県庁所在地間はどこも鉄道で結ばれていない。国の計画では、明治 25 年（1892）の鉄道敷設法ですでに「香川県下琴平ヨリ高知県下高知ヲ経テ須崎ニ至ル鉄道」、「徳島県下徳島ヨリ前項ノ線路ニ接続スル鉄道」、「香川県下多度津ヨリ愛媛県下今治ヲ経テ松山ニ至ル鉄道」で 3 つの路線が記され、四国を結ぶ予定であった。しかし、計画の実施は遅れ、県庁所在地間が鉄道で実際に繋がったのは、昭和 2 年（1927）に高松・松山間が結ばれたのが最初である。よってガイドブックでも徳島、高松、松山、高知へは、それぞれ神戸、大阪、岡山から船で行くことをメインに記されており、四国内の移動については、鉄道が示されている場合もあるが、多くのルートで徒歩や人力車での移動が示されている。本報告書の荒武達朗氏による論文において、東亜同文書院長の根津一が明治 34 年（1901）に学生募集のために全国各地を回った日程が示されているが、四国については 3 回に分けて訪問し、四県を回った[22]。10 月に和歌山から徳島に来て、香川と回ってから本州に移動し、岡山・広島を回ってから愛媛を訪問し、また本州に戻って九州へと向かった。高知へは 12 月に入ってから単独に訪問した。この旅行の時期は、喜賓会のガイドブックと簡易版の刊行と同時期であり、限られた日程の中で四国の主要都市を訪れるには、一回で回りきるよりも本州と行き来しながら訪れる方が効率的であったことを表している。

四国四県の交通面での結びつきの弱さは、今日まで続いており、観光産業を含めて四国の経済発展における課題となっている。

---

[20] 高梨健吉.「英文日本案内記（宇和島）」.英学史研究.1979 巻 11 号（1978）.p177-180.

[21] David Moreton. “Shikoku: The Centenarian Perspective of Frederick Starr”. 依岡隆児編.『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書「異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査研究から」』（2018）.p28-40.

[22] 荒武達朗.「大正・昭和期徳島の海外留学生：東亜同文書院で学んだ県人」. 依岡隆児編.『平成 30 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書「異文化に照らし出された四国～外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～』（2019）.p33-47.